

できるやんか ～お好み焼きの名店「千房」にみる人づくり～

千房商事株式会社 代表取締役 中井 政嗣 氏



◆ 略 歴

昭和20年奈良県に生まれる。昭和36年中学校卒業と同時に乾物屋に丁稚奉公。昭和48年大阪ミナミ千日前にお好み焼専門店「千房」を開店。大阪の味を独特の感性で国内はもちろん、海外にも広めている。昭和61年40歳にして高等学校を卒業。主な著書として、『無印人間でも社長になれた』（ばるす出版）『できるやんか!』（潮出版社）がある。

・はじめに

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、お好み焼き専門店「千房」の社長の中井政嗣と申します。どうぞよろしく願いいたします。

簡単に概要を紹介したいと思います。北は北海道から南は九州、福岡、熊本まで全国展開しております。先月オープンした有楽町も含めて、国内には52か店あります。また、12年前から海外もスタートしまして、ニューヨーク、オーストラリアのゴールドコースト、韓国のソウル、ハワイのホノルルにあったのですが、残念ながら、ニューヨーク、オーストラリア、韓国は大失敗いたしました。約6億ほど失敗しまして、あのお金が今あればなと思ったりしますが、おかげさまでハワイに関しては大盛況で今も続いています。店舗数は合わせて53か店、従業員総数が786名です。半数以上がアルバイト、パート、フリーターですが、お客様からみればアルバイトに至るまですべて社員として見られるわけですから、アルバイトたちに対しては社員以上の教育をしなければなりません。グループ合わせまして年商が50億円を突破したというような会社です。

・学歴と学問

なぜそうなったのですかとよく聞かれますが、学歴はありません。昭和36年に中学を卒業し、社会人となりました。そして、全国展開まった中の37歳のときに、大阪府立桃谷高等学校に入学しました。これは通信制です。4年間レポートを出しながら、月、水、金、日の週4回スクーリングに通い続けて、おかげさまで4年目に無事卒業証書を手に入れました。でも、まだ気持ちは中卒と同じです。

では、なぜ学校に行ったのかということですが、私も男ばかり3人の子供がおります。この3人が進学の時期になっていくのですが、残念ながら失敗しました。そのときに担任の先生から、息子さんはお父さんの背中を見て育っている、「おやじは中卒でもああして元気に活躍している。学問なんてくそくらえだ」と言われていると言われました。学歴なんてくそくらえというのは分かるけれども、学問はそうではないのだと幾ら言っても分からないというのです。そうか、やっぱりおれの背中を見て育っていたのか、それなら・・・と思いました。

そのとき私は37歳、社長をしています。時間

を取ろうと思えば取れますし、小銭も持っています。歓楽街のど真ん中にお店があるものですから、いい友達が毎晩のように飲みに誘ってくれます。そんなことから、自分にもちょっとかせをかけてみたいという思いもあって入学したのですが、入学して間もなく、「中井さん、高校へ行かれていますそうですね。社長をしながら、すごいですね。ポーズだけでも素晴らしい」と言われたのです。二十数年学問から離れていますから、なかなか学問についていけずに、何度もやめようと思う時期がありました。でも、今やめたら、「やっぱりポーズで行きよった」と言われそうだと思います、クラスメートや先生に助けられながら、おかげさまで無事4年目に卒業証書を手に入れます。このことは後々、いろいろなところで大きな影響を与えました。

・共 育

私は、貧しい貧しい農家の7人兄弟の上から5番目、四男に生まれました。金もなかったし、やる気もなかった、そんな私が振り向いたらこんな会社になっていたのです。わずか5人の従業員から、もっと言えば女房と2人から始まりました。お客様のニーズにこたえましょうとよく言われますが、残念ながら私にはそんな余裕がなく、この数少ない従業員がどうしたら胸を張って自信を持って働いてくれるかということを考えていました。つまり、平均年齢23歳の従業員のニーズにこたえてきたわけですが、そのことが、お客様のニーズにこたえていくことにつながっていました。

お店もだんだん忙しくなってきました。よい人材が欲しいと思うのですが、残念ながら、よい人材は全部一流企業に流れていきます。そ

うであれば、とにかく自分のこの手で育てる以外にない、猫の手も借りたい、猫以上の人間だったらどんな者でも採用しようと思いました。

ある日、人間が応募に来てくれました。学歴はもちろんのこと、学業成績、身元保証人は一切問いませんでした。これは今も変わりません。振り返ってみたら、非行少年、非行少女、少年院上がり、鑑別所上がり、あるいは教護学校や養護施設から、この言葉は大嫌いなのですが、一般に「落ちこぼれ」といわれる若者がたくさん入社してくれていました。何回言っても聞いてくれません。でも、一流企業に行くような人たちと比べてはいけなし、焦ってはいけなし、「こんなやつ辞めたほうがいいのに」と思ってもあきらめてはいけなし、比べず、焦らず、あきらめずという三つを信条にしながら、彼らと共に私も育ってきました。これがよく言われる「共育」につながっていきます。

おかげさまで我々外食産業は、学歴も学業成績も問われません。でも、人間性、人柄が徹底的に問われます。大阪に有名な高級料亭「船場吉兆」がありますが、あの「吉兆」の創業者は、2代目、3代目に、「商売ってな、人柄やで」という言葉を言い続けられていたと聞きます。企業は人なり、まさに人育てに始まって人育てに続いております。外食産業というよりも、ある意味では教育産業ではないかということをもた思ふのです。

・「尋常小学修身書」

コンサルタントの先生はよく、「昔の人、あるいは創業者は、昔のことばかり言う。昔のことばかり言っている人間に未来はない」と言われます。しかし、そうではありません。確かに

時代とともに変わっていくもの、変えなければならぬものはたくさんありますし、それはよく承知していますが、幾ら時代が変わろうとも絶対に変えてはならないものもたくさんあるのです。

今から84年前に文部省から出されていた、「尋常小学修身書」を読みました。もちろん私は習ったことはありませんが、感動しました。感激しました。どんなことを教えられているのか、目録だけ読んでみますと、小学1年生は、「よく遊び、よく学べ、時刻を守れ、怠けるな、友達は助け合え、けんかをするな、元気よくあれ、食べ物に気をつけよ、行儀をよくせよ、始末をよくせよ、物を粗末に扱ふな、親の恩、親を大切にせよ、親の言いつけを守れ、兄弟仲よくせよ、家庭、忠義、過ちを隠すな、うそを言うな、自分の物と人の物、近所の人、思いやり、生き物を苦しめるな、人に迷惑をかけるな、よい子供」。

2年生にいきますと、「孝行、親類、兄弟仲よくせよ、自分のことは自分でせよ、勉強せよ、きまりよくせよ、自慢するな、臆病であるな、体を丈夫にせよ、友達に親切であれ、不作法なことをするな、人の過ちを許せ、悪い勧めに従うな、正直、忠義、約束を守れ、恩を忘れるな、祖先を尊べ、年寄りに親切であれ、召し使いをいたわれ、辛抱強くあれ、工夫せよ、規則に従え、人の難儀を救え、よい子供」。

せっかくですので3年生までいきますと、「忠君愛国、孝行、仕事に励め、学問、整頓、正直、師を敬え、友達、規則に従え、行儀、勇氣、堪忍、物事に慌てるな、皇大神宮、祝日、儉約、慈善、恩を忘れるな、寛大、健康、自分の物と人の物、共同、近所の人、公益、生き物をあわれめ、よい日本人」です。3年生になっ

て、「よい日本人」が出てきました。よい日本人とはということが書いてあるのです。

「父母に孝行を尽くし、師を敬い、友達には親切にし、近所の人とはよくつきあわねばなりません。正直で寛大で慈善の心も深く、人から受けた恩を忘れず、人と共同して助け合い、規則には従い、自分の物と人の物との分かちをつけ、また、世間のために公益を図らなければなりません。そのほか、行儀をよくし、物を整頓し、仕事に骨折り、学問に励み、体の健康に気をつけ、勇気を養い、堪忍の心を強く、ものに慌てないようにし、また儉約の心がけがなければなりません。かように自分の行いを慎んで、よく人に交わり、世のため人のために尽くすように心がけるのは、よい日本人になるに大切なことです。そうして、これらの心得は真心から行わなければなりません」。

1年生、2年生、3年生、目録だけ読み上げましたが、残念ながら二つ飛ばしました。一つは天皇陛下、二つは皇后陛下です。あとは何が問題あるのですか。子供はもちろんのこと、もう一回大人も原点に返れよということを痛切に思います。

・原点に戻る

皆さんもよくご存じの相田みつをさんの詩に、「花があって 花を支えているのが枝、枝があって 枝を支えているのが幹、幹があって 幹を支えているのが根、しかし、根は見えていないんだなあ」という詩があります。根とは何かというと、あなたの考え方、とらえ方、感じ方、生き方、人間性、人柄、人生観、価値観です。それは目に見えません。でも、その考え方、とらえ方が行動となって表れ、見えてくるのです。

そして、枝から花が開いて実がなるというのは結果なのです。桜の木は、1月、2月には枯れ枝のようですが、春になれば間違いなく花が開きます。それはしっかりと根が張られているからなのです。

私たちの命の元は両親です。親を敬いも感謝もしない人間には、ただの一人も大成されたかたはいらっしゃいません。文句ばかり、愚痴ばかり、人の悪口ばかり言う人にも、大成された方はいらっしゃいません。根が腐っていて何が花開くのですか。そう思ったときに改めてもう一度原点に返ることが何よりも大事だと思うのですが、生意気なことを言って申し訳ありません。私はコンサルタントでも専門家でもありません。人を育てることが私の永遠のテーマですし、むしろ私が皆さん方に教えていただかなければならないことはたくさんあると思うのですが、今日は講師ということで目一杯のことを言うかもしれませんが、どうぞお許しをいただきたいと思います。

・平等と公平

私が生まれましたのは、昭和20年9月15日です。奈良県は「河内音頭」で出てきます金剛葛城二上山のふもと、貧しい農家の7人兄弟の上から5番目、四男に生まれました。地元の小学校、中学校を優秀な成績で卒業しましたと結婚したときに仲人さんがそう言ってご紹介くださいましたが(笑)、全く違います。五段階評価で平均の3です。ただ、平均ほどいいかげんなものはありません。5があつて1があれば、間違いなく平均は3ですが、5と1は大変な違いです。私も平均3ということですので、5もあつたのです。元気印がついていまして、体育は

間違いなく5で、運動会は毎回トップです。

昔の運動会は1等賞には1等賞のほうびがありまして、ノート5冊、鉛筆1ダース、もちを焼く網とか金火鉢とか訳の分からないものもありましたが、今は一等賞もべべたも全部参加賞です。平等、平等とって、競争を極端に嫌います。平等は分かるのですが、平等は一律なのです。でも、公平、あるいは公正というのは順位がついています。要するに、平等にチャンスを与えて公平に評価するのなら分かりますが、すべてがおしなべて平等というのは、違うのです。世の中へ出て行ったら、とにかく競争ばかりではないかと思うのです。

・「観光総合案内所」

私は道頓堀商店会の会長をしています。去年、おとし、いちばん道頓堀に人が集まったのは、あのサッカー・ワールドカップのときです。大阪府警や南警察が、徹底的にフーリガン対策の指導をしていただきました。投げたら危ないので、ビールグラスは紙コップにしてくださいというような強い危機管理の指導をしていただいていたのがたかつたのですが、道頓堀、商店街というのはお客様に夢とロマンを与えるところです。危機管理も裏では大事だけれども、そんな表だってやるものではない。夢とロマンを持つところだと思ったときに、残念ながら燃えてしまいました中座という演芸場の玄関のところにスペースがあつたものですから、そこにテントを三張り立てて、「観光総合案内所」を設置しようと思ひました。

道頓堀だけではなく、隣の宗右衛門町、心齋橋、戎橋、千日前、道具屋筋、黒門市場、でんでんタウン、アメリカ村という商店街にまで、

ここで観光総合案内所を設置しましたから、どうぞ皆さんがたの地図を持ってきてください。パンフレットを持ってきてくださいと声をかけました。「Welcome to MINAMI」ということで、私の友人に通訳してくれる人がいて、その人たち約40名も動員されました。私はそのとき、「フリーガンもいらっしやい」と思いました。フリーガンであっても、道頓堀に行ったらそんな気になれなかった、面白かった、よかったと言ってもらえることが我々の役割だと思っただけで、「観光総合案内所」がスタートしていきました。

さて、サッカーにはつきものの「オレー・オレオレオレー！」というあの音楽だけはガーツと鳴っているのですが、周辺の商店街から来ていただいているおっちゃん、おばちゃんは何となく暗いのです。「これはあかんわ」と思いつつも日の丸と「JAPAN」という字をフェイスペインティングし合うと、何となく雰囲気が出てきたのですが、道頓堀というのはすごいところで、だれかが商店街の真ん中で空を見上げながら指さして10分ぐらいじっと立っていたら、最低20～30人は集まってきます（笑）。平日で10万人から15万人、多いときには20万人、土曜・日曜・祝日もなれば40万人から50万人が訪れられる大繁華街で、そんな中で描き合っていたら、途端に若い女の子が「おっちゃん、それどこで描いてもろたん？」と言うのです。「ここや」「描いて」「よっしやよっしや、描いたる」ということで、テントの前にいすを二つ並べて描き始めたら、それを見てる人が「描いてもらおう」と集まってきて、ふと振り向いたら長蛇の列です。

それで描き続けていくのですが、ここで私は大発見をしました。大体若い子なのですが、き

め細かいすべすべした肌で、これは描きやすいと思ったら、何のことはない、描きにくいのです。滑って、クレヨンみたいなのがなかなかのらないのです。ところが、おばさんはきれいにスコーンと描けるのです（笑）。「ちょっとかさついてるほうがええで」などと言いながら描き続けていくうちに、描き終わったら「幾らですか？」と言われました。そのときにピーンときたのです。「あ、金取れる」（笑）。

もちろん無料なのですが、通訳していただいている人たちに食事を提供しなければなりませんし、もちろん経費もかかるわけですから、ボランティア募金箱を作りました。そして、描き終わったら「もちろん無料なのですが、すみません、幾らでもいいですから入れてください」ということをやって、終わってからその募金箱のふたを開けたら、25万円あったのです。私はこのとき、ニーズにこたえるとはこのことなんだということに気づくのです。

・道頓堀川ダイブ

日本対ロシアの戦いが始まりました。そして、「日本頑張れ！」とやっているうちに、日本がロシアに勝ったのです。明るる日のスポーツ紙には「武器を持たない日露戦争」と書いていました。とにかく、「絶対負けるな！」という敵がいたのです。

今度は決勝進出の日本対チュニジアの戦いが、大阪は長居競技場で始まりました。これに勝ったら絶対あの戎橋から道頓堀川に飛び込むということは、地元はよく理解していました。マスコミもよく分かっている、川の両岸のグリーンベルトに早々とテレビカメラのセットが組まれていました。そして、チュニジアに日本が勝ち

ますと、どこからこれだけ人が集まってくるのかというぐらい、道頓堀がびっしり人で埋まりました。橋の上もびっしりです。

あの橋の上には、びっしり人が詰まったら2000人集まれるのです。そこへ機動隊が700人動員されて余計びっしりになっているところで、橋の上にたむろしている若い子たちが川をのぞいています。お巡りさんが慌てて「飛び込まないでください!」と言うと、それを合図に(笑)、2004人飛び込みました。どうして分かるかという、飛び込んだ人を最初からカウントしていた人がいるのです。ところが、怖いことに、飛び込んだのはカウントしていますが、上がったのはカウントしていないのです(笑)。行方不明者もないので全員上がったと思うのですが、とにかく大変な状態になっていきました。

そして、いよいよ昨年、阪神タイガースがセ・リーグ優勝を果たしました。このとき、早々と6月ぐらいから、ぼろぼろと飛び込んでいました。飛び込むと言っても飛び込むと思うのですが、サッカー・ワールドカップのとき飛び込んだ人はどこへ行ったかという、風呂屋さん、サウナに行ったのです。風呂屋もサウナも最初はよかったそうなのですが、帰ったあとに湯が汚れているということで、浴場組合が早々と「川へ飛び込んだ人はうちへ来ないでください」というシャットアウトの指令を出しました。

道頓堀商店街は人情のまちです。飛び込むと言っても飛び込むなら、我々でシャワーを取り付けてやろうということで、名づけて「道頓堀飛び込みシャワー」を南警察に申請しに行くのですが、「中井さん、何考えてますねん。そんなのつけたら、飛び込んででもええと言ってる

ようなものでしょう」と言われてしまいました。どうしようかと考えて、「汚い、汚い」と言われているけれども、どれぐらい汚いか一回調査しようということで、地元で潜水土を入れて水質調査をやりました。

道頓堀というのは水深が約5mあるのですが、その当時は透明度が50cm、3mほどが水で、1~2mはびっしりヘドロが横たわっていました。ヘドロは粒子が細かいので、飛び込むとヘドロが上へ上へと上がってきて、表面が鏡のようになって、兩岸のネオンが映えるのです(笑)。それで、ヘドロが舞い上がっているときの濃度がどれだけかという、5万3000ppmです。田舎に行ったら「のつぼ」がありますが、あれの汚さが3万ppmですから、のつぼの倍です。そんなところへ飛び込むのですから、勢いというのは怖いです。

目をやられてトラホームになります。それから、中耳炎、鼻炎、飲み込んだ人は下痢をしています。何日も会社を休んでいる人はたくさんいるのです。自業自得、自己責任ですのでだれもそんなことは言わないのですが、「やっぱり飛び込んだらあかん」という思いの中で、マジック2から商店街が一斉に大キャンペーンを展開していきました。「ばい菌がうようよいます。とにかく飛び込まないでください」と必死になってやっていったのですが、新聞にも書いていましたように、5300人飛び込んだのです。あるところは6400までカウントしていました。ところが、そのカウンターが壊れたのです。その明るくする日も、その明るくする日も飛び込んでいました。

2日目の昼前、橋の上を通ったら、地方から来た若い男の子が3人、川をのぞいていました。大阪のおばさんはすごいです。スーッとにじり

寄って行って「兄ちゃん、飛び込まへんのか」と言っているのです（笑）。躊躇していたら、「あんた、根性ないのちがう？」と誘うのです。その若い子は思わず飛び込んだのですが、後のフォローがすごいのです。「兄ちゃん、ええ根性しとるから」とチップを1000円やっているのです（笑）。あの死者が出たのはその直後でした。そこからピタッと止まったのですが、おかげさまで今年は何の心配もなく過ごすことができました（笑）。

・ライバル

なぜ阪神タイガースのファンというのはあんなに強烈なのでしょう。にわかファンもたくさんいましたが、これは間違いなく、敵がいたからです。「負けたらあかんで、東京に」と歌にもなっているぐらいのところですが、とにかく敵がはっきりいたのです。

昔はよく、「よきライバル」といわれました。みんな平等、仲よく、仲よくというのは確かにそうなのですが、ライバルというのは大事なのです。千房でも、「ライバルは千房」というキャッチコピーがあります。ライバルは自分自身というもあるし、同じ仲間なのだという中でライバルというものはあるのです。「よきライバル」というのは、一つの目標、目安になりますから、とても大事なのです。平等、平等というのなら、数学の点数が20点も100点も一緒ではないのか、学力を問うなら体力も問うてやれと思います。

感性を問う図画工作、美術もそうです。私はいつも絵に金紙、銀紙を張ってもらいましたが、今は平等と言われて、そういうのは張らないそうです。

・情報の偏り

私は、自分の口で言うのもおかしいのですが、歌はちょっと上手です。ちなみに十八番は三橋美智也、春日八郎、千昌夫なのですが、子供が聞いている音楽を「そんな曲、どこがええの？」と言った途端に、「お父さんも、その三橋美智也の『哀愁列車』のどこがええの？」と言われていました。今、確かに情報は満ちあふれていますが、あふれていながら非常に偏っています。

昔は、例えばNHKの放送など、子供からお年寄りまで同じ情報を共有していました。ですから、ヒット曲は子供からお年寄りまで、だれにとってもヒット曲でした。そういう、子供もお年寄りも共通した情報を発信するところが、今こそ本当に必要ではないかと思います。あることはあるのですが、なかなか生かされていないという気がするのです。

・やめないこと、続けること

私は、数学は五段階評価で1でした。その私が今社長をしているのです。小学3年生のときにかけ算の九九が出てきたのですが、あれが覚えられないのです。黒板の字はよく見えるし、先生の話もよく聞こえるけれども、頭に入りませんでした。でも、小学校4年生のときには間違いなく「 $7 \times 7 = 49$ 」と言っていたのです。それは、学校、義務教育という枠にはめられ続けていたからなのです。3年生のときにかけ算の九九が覚えられないからと学校に行かなかったら、4年生になってもやはりできなかったと思います。

社員研修でもよく言うのです。「新入社員の皆さん、先輩を見て、すごいな、あんなふうになれるのかしらと思うでしょう。でも、ご安心

ください。間違いなくなれます。ただし辞めないでください。手を放さないでくださいね」。PTAなどでもよくお話しします。子供さんが算数で90点、100点を取ったからといって、手放して喜ぶものではありません。あるいは10点、20点だったからといって、嘆き悲しむものでもありません。世の中に出て行ったら、もっともっと大切なことはいっぱいあるのです。

余談ですが、私は37歳のときに高校に入学してから卒業するまで、大半が5でした。長年経営に携わってきたからです。経営には残念ながら公式がありません。こうしたらやる、こうしたら儲かる、こうしたら売れる、こうしたらお客さんに喜んでもらえるという公式を自分なりに編み出して、答えは、売れたか、はやったか、儲かったか、お客さんに喜んでくれたかです。それで「ああ、正しかった」と思うのですが、経営の公式は時代と共に変わります。でも、数学の公式はただ一つで、そこに数字を当てはめていったら間違いなく答えが出てくるのです。

例えば、 $(2 \times 3) + (3 \times 2)$ という問題があったとします。これは、答えを出そうと思ったら、括弧の中を先に計算してから足すのです。要するに、括弧をつけている間は絶対答えが出てこないのです。括弧を外さないと答えが出てこない。「人間関係もそうや。かっこつけてる間は絶対答えが出てこないんやな。括弧を外さなあかんのやな」ということです。37歳、世の中のことも何となく分かりかけてきた、だからこそ数学の授業を受けながら社会の勉強もしていくのです。なるほどなと思うのです。

難しい、難しいと言われる物理などでもそうです。F = ma という簡単な式がありますが、

これは速度と時間とエネルギーの関係なので、まさに経営そのものだったのです。学歴欲しさに入学しましたが、やはり高校ぐらいの学問は学ばなければいけないのだなということを思います。

私の上に兄、姉がおります。これが非常に学業成績優秀なのです。三つ上の兄なんて、クラス委員や生徒会長をしていました。その下に私がいるのです。昔から、「できの悪い子ほど、親から見ればかわいいものだ」といわれますが、あれはうそですね（笑）。やはりできのいい子供に期待をかけてました。そんな学業成績優秀な兄、姉も、いずれも中学を卒業し、就職していきました。三つ上の兄のときなどは、卒業の間近には担任の先生が「奨学金もあるから、進学させてあげたらどうですか」と毎晩のように家に来ておられました。それにもかかわらず、就職していきました。さて、私の番が来ました。担任の先生は一回も家にのぞきに来られませんでした（笑）。

・父の最期の姿

忘れもいたしません。地元の白鳳中学卒業式の明くる日、昭和36年3月19日、そぼふる小雨の中、だれよりも尊い父親に連れられて、私は奈良から大阪に出てまいりました。まだ15歳の子供です。頭は丸刈り、学生服を着て、肌着の入った風呂敷包みをわきに抱えて、おやじのあとをとほとほとついていくのです。就職です。希望を胸いっぱい描いてと思うのですが、学歴もない、金もない、やる気もない、そんな人間が夢や希望を持てるわけがありません。不安でいっぱいです。

近鉄南大阪線、降りたった駅があべの橋でし

た。たくさんの人たちを見るなり、「おやじ、このままおれをどこかに売り飛ばすのところがうやろか」(笑)と不安いっぱい地下鉄に乗って梅田に出て、梅田から阪神電車、兵庫県の尼崎というところの三和市场に連れられていきました。その間、おやじは、「政嗣、1年間はどうなことがあっても家に泣いて帰ってきたらあかんで」と何度も何度も私に言いました。励ますつもりで言ったのですが、「おれにはもう帰るところがあらへんのか」と、むしろ突きはなされた思いでした。

別れ際、そっと私に500円を握らせてくれました。今もらった500円と風呂敷包みに包まれた肌着こそが私の全財産でした。「政嗣、元気でな」と言って、私を残しておやじは帰って行きました。四つ角まで私は父親を見送りました。おやじは二、三度心配そうに振り向きながら、人込みの中に消えていってしまいました。私はいまだにこの光景が頭にこびりついていて、しかも忘れられません。この姿こそが、私が父を見た最期の姿になったからです。

その年の昭和36年10月10日、父はがんで亡くなりました。「チチキトク、スグカエレ」というので飛んで帰ったのですが、わずか10分前に亡くなっていました。胃がんでした。でも、泣けないのです。何べんも帰りたい、帰りたいと思ったけれども、おやじが帰ってくるなと言うから帰れなかった。でも、今帰ってきたんだと思って、周りを見渡したら、卒業したときのまま残っているのです。中学校を卒業するとき、家にはまだテレビがありませんでした。にもかかわらず、新品の白黒のテレビが置いているのです。それを見るなり「おれ一人欠けただけで、家がこんなに豊かになる」(笑)と思いながら

しばらくたって、「おやじ、死んだんだ、死んだんだ」と思ったら、涙があふれてきました。学歴はない、お金もない、ましてやる気もない、このおやじが私にとってすべてだった、その頼りのおやじが死んでしまった。何を頼りに生きていったらいいのだと思ったときに、今は決してそうは思いませんが、そのときにはお金だけがすべてとしか思えませんでした。小さな店でもいいから独立しようと思いました。

・お金を貯めるためには

このことは新入社員にもよく言うのですが、「皆さん、しっかりお金を貯めなさい」。すると、ある社員が、「社長、金がすべてと違います」。「それは貯めてから言いなさい」(笑)。私も、お金があればどれほど幸せになれるかと思った一人です。小銭ながらも入ってきたときにはそうは思いませんでした。お金がなくて不幸せになっているかたはたくさんいらっしゃいます。お金は大事です。

どうかこの人間を一人前の商売人にしてやってください、給料も待遇も休みもどうでもいい、そのかわり住まいと食だけ与えてやってください。これが丁稚奉公、徒弟制度です。昭和36年、初任給はわずか2000円、2か月目から3000円です。しかも、茶色い薄っぺらい封筒の表に「中井君 3000円」と書いてあるのです。明細も何もなしです。でも、そんなものだと思って押し頂いてきました。

兄が私に言いました。「政嗣、独立しようと思ったら金貯めなあかんわな。金を貯めることは簡単なんやで。金はな、収入が高いことと違うねん。使わんかったら貯まるねん」。私は思わず笑いました。そんなこと、だれでも知って

います。でも、その言葉というのはいまだに座右の銘になっています。財布にお金がなくても何とも思わない。お金は使わなかったら要らない、使わなかったら間違いなく貯まるというわけです。

もう一つ、「金銭出納帳をつけろ」と言われました。小学校、中学校と絵日記もろくに付けたことのない私ですが、何かにすがっておかなければいけない、金銭出納帳をつけていたら一人前の商売人になれるのか、だったらつけようと思って、つけ始めました。道で5円拾った、10円拾った、そんなものまで克明に記帳していきました。この金銭出納帳が後々において、私の大きな助けをしてくれます。

・最初の仕事

どんな仕事をしていたのかというと、乾物屋さんなのですが、だしじゃこ、いりこなどの小売りをやっておられます。山積みされたじゃこをわしづかみにして、目方を量って袋に入れて売りますが、頭が取れたりしっぽが取れたりして、くずが出るのです。朝起きたら、山積みされたじゃこを網の目の粗い「とおし」でふるいにかけて、残ったものだけが商品として売られていくのです。

単調な仕事です。こんな仕事はどうして一人前の商売人になるための仕事なのか。おれは中卒だから、こんなあほみたいな仕事ばかりさせられるのか。高校さえ行っていたらこんなことせんでもいいのにな。嫌だ、嫌だ。毎日毎日が惰性なのです。じゃこの顔を見ただけでも腹が立ってくるのですが、ある日ひっくり返そうとしたら、網の目の後ろに2〜3匹のじゃこが引っかかっているのです。取ろうと思うのですが取

れません。表からつまみ出しながら、私は感動しました。「おまえ、偉いやっちゃん。よう引っかかっていたな。売る方に入れてあげるけれども、もう一回ふるいにかけていたら間違いなく落ちてしまうので、それまでに大きなりや」と言い聞かせながら、商品のほうに入れてあげました。

その発見から、今まで見たことのない網の目の後ろが気になるのです。20〜30匹が引っかかっているのです。本来ならこの20〜30匹のじゃこを全部商品のほうに入れてあげたいのですが、残念ながら、ふるいにかけているのです。力づくでバツと押したらバラバラと落ちるのです。落ちたじゃこを見ながらまた思うのです。「おまえ、根性ないやっちゃん、引っかかっとなら入れてあげるのに。でも、今日は特別入れてあげるから」とより分けてきました。

実は、このときに私は経営者をしていたので。じゃこの運命をおれのこの手で握っているのだ、どうにでもなるのだということです。こいつは間違いなく「くず」、落ちこぼれだけれども、「みんなに言うたらあかんぞ」と思いながら拾い上げてきた、このことが、落ちこぼれ、非行少年、非行少女を採用する大きな大きな基礎になっていたなんて、そのときには全く思いませんでした。あれほど嫌だ、嫌だと思ってやっていた仕事にもかかわらず、とらえ方、考え方が変わっただけでこれほど仕事が楽しくなるのかということも初めて味わいました。言うまでもなく商品も大事に扱っていくようになりました。

・正直者はばかを見る

昭和36年ごろというのは、3分の1が中卒で就職していく時代でした。ちょうど2年目だっ

たのですが、就職していった友達と街でばったり会って、「久しぶりやな」といろいろ話しているうちに給料の話になりました。私はそのとき5000円だったのですが、友達は1万円だといふのです。私はびっくりして、「悪いことをしてるのどこがうの？」と聞いたら、私とよく似た仕事で、しかも私より楽で給料は倍の1万円なのです。

独立しようと思ったらお金を貯めなくては行けないものですから、早速私は実家に電話を入れました。「おかあちゃん、おれ、今勤めてるところやめたいねん」と言った途端に「何言うてんの、政嗣、ええところにおるのに」「おれも今までええところや思ってたけど、友達は1万円ももらってる。独立しようと思たらお金を貯めんなんから、そこへ行きたいんや」「いったん仕事に就いたら、石の上にも3年。3年は辛抱せなあかん。まだ2年目やないの。何言うてんの」「おかあちゃんこそ何言うてんの」。

田舎のことです。田んぼも畑もありました。おやじが死んだら全部長男が相続するのです。「長男に相続することに意義ありません」という委任状に、「政嗣、そこに判を押しとき」と言われて、訳が分からないで判こを押したのです。そのお返しに、日の丸の国旗、教育勅語、天皇陛下の家族の写真の3点セットをもらいました。親からもらったので大事にしていますが、へのつっぱりにもなりません。お金は一銭ももらっていませんから、「独立しようと思たら、お金を稼がなあかんのや」と思いつき文句を言いました。泣き言を言いました。愚痴をこぼしました。「何言うてんの、政嗣、辛抱しなさい。今にきっとよくなるから」と言いながら、電話の向こうで泣いているのです。たった一人

のお袋を泣かしたらあかんと思いつつ「よっしゃ分かった、辛抱するから」「そう、政嗣、よう言うた。辛抱するねんよ、今にきっとよくなるからね」。

今、この年になれば分かります。あの差額の5000円はどこかで貯金されていて、今利息がついて返ってきているのだと思います。「これだけやったのに、なんでこれだけしか収入があらへんのだ」とか、「あの人のために私はこれだけやってるのに、なぜあの人は分かってくれないのか」とか、思うことはいっぱいあります。でも、そんなことはありません。間違いなく埋め合わせされる時期が来ます。「正直者はばかを見る」とよく言われるのですが、本当に正直者はばかを見たのですか？最後の最後まで見届けたことはありますか？確かに一時的にばかを見ることはあります。でも、最後の最後には間違いなくつじつまが合うのです。埋め合わせられる時期が来ます。

・仕事の目的（目標）

おやじは百姓をやっていました。朝早くから晩の遅くまで働きづくめです。そんな後ろ姿ばかり見て育ってきました。なんで家にお金がないのだか思いながらも、家のことをほうっておいて、村のことを一生懸命やって、お人よしとか言われてました。でも、そんなおやじを私は心から尊敬していました。今、この年になれば分かります。「おやじ、実はお金もうけできたんだ。でも、自分にしないで、全部子供に残したんだな」と思います。

人をだまして、踏みつけて、はねのけて、稼いでいらっしゃる人は、間違いなく、その子供さんはお金もうけできないそうです。私は宗教

家ではありませんし、信心深い男でもありませんが、神の教え、仏の教え、言っていることはなるほどそのとおりだということを、体験、経験から学んできました。18、19、20歳の頃といえば、おいしいものも食べたい、いい服も着たい、楽しいところへも遊びに行きたいと、みんなと同じように思いました。でも、今貯めているこのお金は、そんなことのために貯めている金ではない、独立という目標を持っていたのです。

皆さん、目標をお持ちですか。今の若い人たちに「目標を持っていますか」と聞いたら、大半が「別に」と言うのです。「目標は大事ですから」としつこく言い過ぎると、「超ムカツク！」です(笑)。でも、目標というのは難しいわけでも何でもなくて、行き先なのです。海外旅行と国内旅行では準備が違います。海外旅行をしようと思ったら、パスポートを取らなければいけません。大学に行くこと、あるいは専門学校へ行くこと、こんなのは目的ではありません。確かに、パスポートの働きをしてくれるのかもしれませんが、海外旅行に行く人にとってパスポートが要るのです。

私どもには、住み込みでアルバイトをしながら1年間調理師専門学校に通うというシステムがあります。今、1年間調理師学校へ行くのに、250万円要るのです。その子たちを集めて2時間から3時間の研修をするのですが、「その250万を自分でお金を払った人」と聞くと、ただの一人もいません。親に払ってもらったのですね。それはどんな金かご存じですか。血のにじんだような金なのです。高校へ行くのにお金を使って、まだ250万円も使わずのです。「この金は絶対に返してくれ。しかも、1年間どんなことがあってもやめないうで、無事卒業してくれ。そし

て、調理師の職場に行くんやで」と思いっきり研修をするのですが、それでも1年の間で5%やめていくのです。しかも、せっかく専門学校を修了して調理師免許も持ちながら、そのうちの1割は違うところに行っているのです。

何のために専門学校へ行ったのですか。もっと事前に行き先をはっきりしなさい。専門学校へ行くこと、大学へ行くことが目標ではありません。おれはこういうことをしたいからという、そのための準備として行くのなら分かりますが、何か間違っているのではないか思うのです。行き先が分からないのです。皆さんはどうですか。目標をお持ちですか。「いや・・・」というかたが経営者にもたくさんいらっしゃいます。先行き不透明、先のことは分からない、行き先が分からない。これは迷子です。

迷子には三つの条件があります。「行き先が分からない」「現在地が分からない」「脱出する方法が分からない」の三つです。そして、迷子者どうしが幾ら話してもだめです。余計迷ってくるのです。脱出された人に謙虚に聞くことが何よりも大事だと思います。

・100km歩破チャレンジ大会

これは余談ですが、毎年10月の第3土曜日から24時間かけて、24時間100km歩破チャレンジ大会というのが開催されています。大阪府警と民間とでやっている行事なのですが、9年ほど前、20回の記念大会ということで、親しい警察官から「スポンサーになってくれませんか」ということだったので、喜んでお引き受けしました。会うたびにそんな話ばかりされるのですが、あるとき、一緒に歩きませんかと言われたのです。100km走るのは絶対だめですが、よく考え

てみたら1日や2日寝ないで立ち仕事をしたことは幾らでもありますから、前に足を出すぐらいだったらいけるのではないかという安易な気持ちで、参加すると約束しました。

日ごろ歩いたことはありません。私は大阪は堺というところに住んでいるのですが、本社の中央区道頓堀まで片道16kmあるのです。この16kmを一回歩いてみようと思って、日曜日、男性の事務員を誘いました。彼がつきあってくれて、私の家から本社までの16kmはすっと歩きました。帰りは電車で帰ろうと思ったのですが、「こんなの簡単やんか。よし、帰りも歩こう」ということで歩くのですが、30km地点の堺の大泉緑地で足が完全に動かなくなりました。あと2km、這うようにして家にたどり着くのですが、100kmはとてつもなく厚い壁です。

本番コースは大阪府警本部前から谷町筋、あべの、堺東を通して、国道26号線を、岸和田を越え、関空のりんくうタウンを越えて、和歌山のちょっと手前、国道26号線のどん突きの桜が丘北交差点までが50kmで、本番は往復なのです。この本番コースの片道をリハーサルをしようということで友達を誘いますと、好奇心いっぱい14名が参加しました。32kmはすっと歩きました。その間ぼろぼろリタイヤしていく人が出てくるのですが、42km地点で残っていた4名全員が足が動かなくなりました。とてつもなく厚い壁です。とにかく32kmも歩いたし、42kmも歩いたから、24時間あれば50kmは間違いなく歩けそうです。でも、目標はちょっと高い目にしなければということで、70kmということで周りに言いふらしていました。

いよいよ当日を迎えました。スポンサーということなので、ちょっと挨拶してくださいとい

うことでマイクを持たされました。「私は32kmと42kmと2回もリハーサルをしました。50kmは間違いなく歩けると思うのですが、今回の私の目標は100kmです」と言うてしまったのです(笑)。70kmと言おうと思ったのですが、前の方が100km歩くとかいう話ばかりされるものから、100kmと言ってしまったのです。演台を降りた途端、連れが「中井さん、100km歩くのですか」「違うがな、この口が言いよった」(笑)。

スタートが切られました。32kmはすっと歩きました。42kmもすっと歩きました。50kmで晩の10時26分です。つまり、10時間26分かかったのです。人間の歩く速度というのは1時間で5kmです。信号もたくさんありますし、その間食事を取らなければなりません。コンビニでおにぎりを買って食べながら歩くという状況なのですが、スピードに応じた小集団があちこちできるのです。43kmあたりで、7人の小さな集団ができていました。その中に一人、弁護士の秘書をしているという21歳のアキヨちゃんがありました。きれいな、か細い子なのですが、この子の後ろ姿を見ていたら、「おしりにうんこ挟んでるとちゃうの？」(笑)。がにまたで歩



いているのです。「そんな歩き方してたら、嫁に行かれへんで」などと言って笑っていたのですが、この子も50km行きました。すかさず私は言いました。「アキヨちゃん、もうやめときや。無理はしてもいいけど、無茶はしたらあかんからやめときや」。

「無理はしてもいいけど、無茶はしたらあかん」。このことはすごく大事なのです。「むちゃやからやめなさい」と必死になって言うのですが、「暗がりには一人では危ないから連れていけ」と必死になって彼女も言うのです。それなら行こうかということで、晩の11時、ゴールに折り返すのです。21歳のアキヨちゃん、50歳のおばちゃん、26歳の独身男性、そして私の4名が、ゴールに向かってスタートしました。55km、60km、61km、このあたりに来たときです。国道26号線、土曜日の深夜です。暴走族がバリバリと通るのです。「とにかくあんなやつにかかわったらあかん。目線合わしたらあかんで」と隠れるように歩いている横に暴走族の車が一台来て、「何してんの」と言うのです。

「胸にゼッケン、背中にゼッケン、見りゃ分かるやろ」と思うのですが、そんなこと言えなくて（笑）、「歩いてるんだ」と言った途端に「なんで歩いてんの」と言われました。私はびっくりしました。自分でもなんで歩いているのかなと思いましたが、「どこからどこまで歩いてんの」「大阪城から和歌山の手前まで往復やってるねん」「あほちゃうか」（笑）。でも、すごいです。「おっちゃん、頑張りや」と言われた途端に、「ああ、ええ人や」と思わず思ったのです。

そんなことがあって、65km、70kmと進みま

す。あの吉本興業の間寛平さんが「おれ、止まったら死ぬねん」と言うておられますが、そう、止まったら歩けません。でも、止まらなければ歩けないものですから、腰掛けるところがあって足を浮かしたのなら、脈拍と同じように全身がドックドックするのです。体力、肉体は限界なのですが、あとは自分との闘い、精神力、忍耐、努力、根性です。これを頭にたたきこんで一步を踏み出すのです。踏み出した途端に、まるで針のむしろに足を突っ込んだかのように全身に激痛が走ります。痛い、痛いと言いながら歩いていくと、人間というのはすごいです。歩けるのです。慣れてくるのです。

75km、80km、そして85kmまで来ました。この段階で肉体、体力はもちろん限界ですし、同時に、精神力、忍耐、努力、根性も全部飛んでしまうのです。どうなるかというまづ眠たい、むちゃくちゃ眠たいのです。その後も大会に参加していくのですが、一緒に歩いている仲間がもたれかかってきたのです。歩いているのですが、そのうちいびきが聞こえてくるのです。でも、歩いているのです。寝ながら歩くかなと思ったのです（笑）が、わずか1分足らずの信号待ちでも、どこか壁でもあるものなら、足をL字型にしながら熟睡します。それぐらい睡魔に襲われます。

その次に足が痛い、足の裏にマメができます。はがれたら、また中にマメができます。爪も、片足で間違いなく2～3本ははがしてしまいます。今は準備する段取りもあるのでそんなことは絶対ないのですが、ところが素人は、ぱっと行ってそういう状況になるのです。女性の方は股関節をやられます。

その次、今度は朝の4時から5時に向かって

とにかく寒いのです。風邪を引いたみたいに背中がぞくぞくしてきます。そのうちに、太陽が昇ってきます。帽子をかぶっていますが、頭がもうろうとなってくるのです。遠回りでもいいから日陰をよって歩こうとする、そんな動物の本能が出てくるのですが、そういうことがあって、なんと23時間42分で見事この4名は100km完歩できたのです（拍手）。

・100km完歩

なぜ完歩できたのでしょうか。157名が参加されました。そのうちプロみたいな人を外しましたらわずか21名が100km完歩したのです。その21名の中に我々4名も入っていたのですが、この21名が全員が涙ながらに言われた一言は、「皆さん、大変お世話になりました。本当にありがとうございます」とです。これは日頃から言葉に出して言いますし、何となく分かっていたのですが、身をもって体験しました。ただの一人も自分の力で完歩したとは思わないのです。90km、堺から大阪に向かう途中、頻繁にサポート車が横へにじり寄ってきて、耳元に甘いささやきをかけるのです。「中井さん、車に乗られたら？」。連れの3人が首を横に振った途端に、車はさっと通り過ぎていくのです。後ろ姿を見ながら、顔を見合わせながら「乗りたかったな」（笑）。

もうちょっと、もうちょっとと思いながら進むのですが、90kmから頭がもうろうとなってくるのです。一発で効くスタミナドリンクを1本補給しようと思って、1軒開いていた店に飛び込みました。「すみません。一発で効くスタミナドリンクを1本下さい」「2000円です」「高いですね。1本下さい」。ふっと振り向いたら、

入り口のところで連れの3人がのぞいてくれているのです（笑）。「すみません、4本下さい」（笑）。飲んだ途端にこの連れの3人がえらい元気を出して、ついて行くのに往生したのですが、完歩したあと、その21歳のアキヨちゃんが泣いてました。

「アキヨちゃん、途中でやめようと思わへんかったか」と聞いたら、「何度もやめようと思いました。でも、自分から連れていってくれと言った手前、言い出せなくて、だれか『やめよう』と言ったら私も『やめよう』と言ったんですけど、だれ一人もやめようと言わへんかったから、完歩してしまいました」。「完歩してしまいました」と泣いていました。自分が元気になろうと思ったら、周りを元気にさせないといけないんだなということがよく分かりました。

このアキヨちゃんは、70kmで前よりももっともって不細工な歩き方をしていました。でも、その後ろ姿を私は笑えませんでした。95km、たくさんの人たちが通っているあべのの歩道橋を、階段の手すりに体をねじるような姿で上っていく後ろ姿に私は涙が出ました。こんなきゃしゃな子でも頑張っている、頑張らんとあかんと思いました。強い者から学ぶわけでも何でもないです。弱いものが一生懸命やっている、これだけでも学べるということがよく分かりました。

まして、こんな方がいらっしゃいました。もう70km、素人は限界、もうやめよう、リタイヤしようと思いながら、ふっと顔を見上げたら、50mほど前方に、やはりゼッケンをつけた年配のかたがヨタヨタと歩いていたのです。あの人がりタイヤしたら、自分もリタイヤしようと思いながら、その人をずっとマークしていました。何kmか行ってふっと振り向いたら、ゼッケンを

つけた年配のかたが、後ろのほうで自分を見てヨタヨタと歩いていたのです。「自分がリタイヤしたら、きっと後ろのあの人はリタイヤするのだ」と思ったときに、リタイヤできませんでした。そして、見事この3人は完歩したのです。

一人で生きているのと違う、お互いに影響を受け、与え合っ生きていくのだということをも身をもって体験するのです。まるで人生の縮図を見ているようでした。自分が学ぶということではなく、自分を学ぶ、まさに「気づき」の世界です。

・気づきの教育

今、正直言って、「気づき」の教育というのは全くといっていいほどなされていません。まさに指示待ち人間です。でも、今の若い人たちに何の罪もありません。家庭であれば親、学校であれば先生、企業であれば幹部に問題があるのです。あまりにも言わなさすぎるのです。昔は「一を聞いて十を悟れ」でしたが、今は十言っ一つやってくれたら、ようやってくれたのです。

まさに悟るということです。教えられたことは忘れます。でも、悟るというのは内面から出てくるものですから、忘れないのです。この悟りの教育、気づきの教育が全くといっていいほどなされていません。

昔は、言ったやつはやってくれました。しかし今は、言うたやつは聞いただけのことであって、やるとは限らないのです。ですから、チェックしなければいけません。そして、やれていなかったら、感情を出さずにまた言うのです。言い続けて、チェックして、やれていたら褒めてあげる。この三つです。企業であれば、まさ

に幹部の問題なのです。

例えば、これはうそみたいな話ですが、秋、新入で事務員が入ってきました。もらった柿があったので、「柿をむいてきて」と言ったら、「はい、かしこまりました」と言って柿をむいてきてくれました。お皿の上にとろんとむいてきたのです。「むいて」と言ったのだから合ってるのです（笑）。「すみませんが、カットしてくれないですか。フォークがなかったら、つまようじでもけっこうです。よかったですおしほりを下さい。お水もあつたらお水も下さい」「はい、かしこまりました」。そして、今度は完璧にしてくるのです。「これから、果物というのはこういうふうにしてください」「はい、かしこまりました」。何の悪びれもないのです。

あるいは、現場に配属された新入社員に「玄関を見てきてくれるか」と言ったら、見てきてくれたのです。「どうやった」と聞いたら、「何がですか」（笑）。ポストに何か来ていなかったか、あるいは看板、サンプルいろいろあるわけですから、チェックもあるのです。「いや、知りません」「現場を見てきてといたら、そういうことだから」「はい、かしこまりました」。これまた何の悪びれもないのです。

秋の慰安旅行で宴会場に行くと、私の座る上座に平気で新入社員が座っているのです。あるいは、宴会が盛り上がってきて、新入社員がビール瓶を持って来てくれたのですが、上座にいる私ではなく、隣に座っていた店長の前に座るのです。私の顔を横目でチョロチョロ見ながら、「店長、どうぞ」と注いでいます。なんでおれに注いでくれないのか、そうかビールが入っているからか、などと思っていたのですが、またこの店長もまたぬけぬけとグラスを出すのです。

注ぎ終わって、次は私だと思ったら、私の顔を横目で見ながら、「失礼します」と去ろうとするのです。私は思わず「すみません、私にも注いでくれませんか」と言ったら、「社長、私みたいなのが注がさせてもらっていいのですか」と言うのです。こんな教育、だれもしてくれないのです。

あるいは、深夜までやっている店がありますので、夜食を食べに連れて行くことがあるのです。私はきつねうどんを頼みながら、店長をはじめみんなに「好きなものを頼みなさい」と言ったら、平気で天ぷらうどんや肉うどんを頼むのです（笑）。もちろん食べていただきますが、食べていただいた明るる日に店長を呼び出して、「悪いけどね、社長がきつねうどんを食べたら、部下たるものはきつねうどん以下のものを頼むのが上司に対する礼儀や。日ごろ何を教えてるの」と言いました。この話をある講演会で話をしたときに、聞かれたかたから、「好きなものを食べろと言ったのなら、食べさせてやったらええやないか」とクレームの手紙が来たのです。そんなことは私も分かっていますが、上司に対する礼儀を言っているのです。内輪だからこれでいいけれども、よそに行ったら間違いなく恥をかきます。こんな教育はだれもしてくれないのです。

そんなことがあって何日かたってから、同じメンバーでまたうどん屋さんへ行きました。私も気を利かせて肉うどんを頼みながら、「何か好きなものを頼みなさい」と言ったら、「社長、何を頼まれたのですか」「私は肉うどんを頼んだ」「そうですか。では、きつねうどんを十幾つ頼んでください」「それじゃ、全員肉うどんにしなさい」「いや、社長は肉うどんなんですし

よう。ですから、私たちはきつねうどんがいいです」「そのことはもう分かったから（笑）、全員肉うどんを頼みなさい」「社長、後できつねうどんと言わないですね」と。

あほみたいな話なのですが、こんなことが大事なのです。要するに、教育は徹底的にやっているけれども、人を育てることができない。学歴は確かにりっぱだけれども、学力がない。知識は確かに豊富だけれども、知恵工夫が足りない。体格はりっぱだけれども、体力がない。これは一体何を意味するのかというと、体験、経験不足です。そういうものは体験、経験を通じて学んでいくのです。

・商人（あきんど）体験

体験で思い出しましたが、体験学習ということで、年間を通じて全国から修学旅行生が道頓堀に入ってきます。私がまず1時間、商人のセミナーをするのですが、そんな中で、「皆さん、100-1は幾つですか」「99」。正解です。でも、世の中は違うのです。100人従業員がいて、一人が変なことをして食中毒を一発出したらゼロです。

たまたまそのときは、岐阜県は長良川中学校の3年生86名が来ました。朝10時に集合して来のですが、そのときに元気のいい子が「おはようございます！」と、はつらつとした挨拶をしているのを聞きました。その瞬間、思わず、いい学校だと思いました。たった一人の行いによって、その学校がいいか悪いか即座に判断されるのです。皆さん方は「長良川中学校」という看板を背負ってやっているのですから、そのつもりでやってください。100-1=0になる可能性があるのですという話をして、次に、体験学習をしに外へ連れて行きます。

体験には勇気が要ります。勇気の要らない体験学習は体験といいません。ただやっているだけです。大きな勇気の要る体験は、実は感動的な体験になります。これから皆さん方に感動的な体験をしていただきますということで、戎橋、太左衛門橋、相合橋のたもとの公衆便所へ連れて行くのですが、「そなん聞いてへん」「何さすんですか」と嫌な顔をしているのです。

我々は早速便器に手を突っ込んで、指で触りながら、「これが臭うねん。このかすみたいのを取ったら全然におわないから」と言うと、子供たちは嫌な顔をしています。「皆さんには使い捨てのビニール手袋を用意しているから、大丈夫です」と言うと、ほっとするのです。掃除の仕方などを話して、掃除をやり始めたら、とにかくへっぴり腰なのです。「あかん、指先にぐっと力を入れて!」と言うと本気でやってくれるのですが、そうするとビリッと破れるのです(笑)。途端に汚水がバーッとくるのです。1個しか与えていないものですから「もうええわ」と外して便器に向かっていくのですが、こすったらこすった分だけきれいになってきます。だんだん真剣になってくるのです。そこへ担任の先生が来られました。感動されます。校長先生も来られて、みんな一緒にうずくまってやっていく姿に、「日本もまだまだ捨てたものじゃない。まだまだいいぞ」と思います。

それが1時間あって、各お店の調理場に入ったりホールに出たりして3時間、従業員と同じまかないを食べて、元の集合場所に帰って修了式があるのです。商人(あきんど)体験修了証書を商店街から出して、グリコからお菓子を提供してもらって、そして終わりなのです。

子供たちからの感想文が私ども商店街に届き

ました。いろいろなことをやらせているにもかかわらず、便所に配属された30名は間違いなく、トイレ掃除をしたことを感想文で寄せてきます。どんなことを書いているかという、「私がいちばん心に残っていることはトイレ掃除です。便器に手を突っ込んで洗うなんて想像もしていませんでした。私は正直、トイレ掃除なんて嫌だなと思っていました。でもだんだんやっているうちに慣れてきて楽しくなってきました。やっぱり掃除をするっていいなとすごく思いました。大阪のトイレ掃除をすることができて、私はとっても幸せです」。トイレ掃除を幸せだと言っているのです。

あるいは、「商店街の人が戸惑うこともなくトイレ掃除を進めていく姿を見て、すごいと感心しました。はじめは逃げ出したいという気持ちもあったけれど、今となっては自慢できる体験です」。トイレ掃除を自慢できると言っているのです。

あるいは、「やってよかったと思いました。大人になっても掃除とかまじめにやらない人がいるけれども、この商店街の人はすごいと思いました。僕もそういう人間になりたいと思いました」。子供は率直に見ているのです。

・リーダーの条件

いろいろな子供たちがいます。17歳うんぬんとかいろいろあります。マスコミに取り上げられます。でも、それは極端なことをしているからマスコミに取り上げられるのです。17歳すべてが問題あるとも思いません。確かに時代で変わりつつあるのですが、いいやつもいっぱいいる、責任はだれにあるのかと思ったときに、この子供たちに罪があるとは思えません。大人に

も問題があります。なんで言ってあげないのか。変な言い方をすると命も危ないというのも分かりますが、のっけからそんなになっているわけではないのです。

猛獣を育てている動物園の飼育係は猛獣からどう思われているかという、まず一つ、親しまれています。感謝されています。信頼されています。そして何よりも、畏れられています。これは実はリーダーの条件なのです。「親しまれる」と「畏れられる」は相反するかのようには見えますが、実は共存できるのです。なぜかという、はじめがあればできるのです。

先ほども言ったように、上司と部下は平等ではありません。対等とか「今日は無礼講」という話もよくありますが、上司が部下に下りてきて初めて無礼講なのです。上司が上司面をしているときに、部下が上司まで行って頭をはたきこんだら、後でえらい目に遭うわけです。そのことを新入社員の研修などでもよく教えてあげるので、今言ったトイレ掃除というのは肩書きは要りません。謙虚になれます、心が磨かれます。そして何よりも、感謝する気持ちが出てくるのです。素直になったら感動します。感動するから素直になるのです。

・長生きする秘訣

いわゆる、長生きする秘訣というのがよくあります。昔は人生50年、今は80年ですから、どちらかというとも100に近いのです。単純計算しても6掛けです。ですから、60歳の人は、昔で言えば36歳です。戸籍年齢にごまかされてはいけません。まだまだこれからです。生き生きしている人は若く見えるし、幾ら若くても嫌々やっていると老けて見えます。そのために、

長生きする秘訣として「かきくけこ」というのがあります。

「か」は「感動派ですか、感激派ですか」。若い人は何をしても笑うというのがあるのですが、喜怒哀楽です。うれしかったら笑ったらい、面白かったら笑ったらい、面白くなくても笑ったら面白くなります。面白いから笑うのではなく、笑うから面白いのです。うれしかったら喜んだらい、悲しかったら泣いたらい。でも、年と共に少々のことでは喜ばないし、少々のことでは悲しまない。そして、コトンと死ぬのです。だから、感動感激しないようになってきたというのは、間違いなく死に近づいてますから気をつけてください。

「き」は「興味を持っていますか」です。好奇心旺盛ですか。何事にも興味を持たなかったら、面白くも何ともありません。

「く」は「工夫していますか、知恵を出していますか」。先ほども言いましたが、教育とか勉強というのは仕入れです。我々もそうですが、黒門市場でどっさり材料を買ってきて、調理場で加工して、商品になって初めて材料を仕入れた意味があったのです。勉強したのなら、それを実行しなさい。そして結果が出て、初めて勉強した意味があったのです。ところが、セミナーをはしごしている人がいます。セミナーを受けにいったどっさり仕入れてきて、明くる日またセミナーに行くのです。仕入ればかりしているわけです。ところが、前に仕入れたものは、もう賞味期限が切れています。在庫をどっさり抱えて何をしていますのかということです。

仕入れは少ないほうがいいのです。「思う」というのは1の力です。「実行する」というのは10の力です。そして、それを続けるというの

は100の力です。私は何も知らなかったのです。でも、やっていたのです。知ってる人とやっている人では、間違いなくやってる者が勝ちます。分かるからやるということがありますが、分からなくてもやったら分かるのです。「わかる」の「わ」と「か」がひっくり返ったら「かわる」です。分かるということは、変わるということです。「分かった、分かった」と言って変わらない人は、決して分かったことにはなっていないわけです。

※「け」健康ですか。心と体の健康が大事、病は気からと言います。

「こ」恋をしていますか。

・教育する者とは？

話が脱線しましたが、目標は高ければ高いほどつらいし、苦しいです。でも、それをやり遂げたときに、心の底から大きな満足感がわきます。つまり、自信がつくのです。続けていくことによって、それが大きな信頼、信用につながっていくということなのです。

新入社員の研修では、努力しなさいということを思いっきり言います。昔と違って、今は非常に楽です。昔はみんな頑張っていて、その中で成功できるということは本当に少なかったのです。でも、努力したら成功するという太鼓判を押してくれたら、だれでも努力しますよね。僕は今、間違いなく太鼓判を押してあげます。ちょっと頑張りなさい。つまり、周りにはあまりにも怠け者が多いのです。

学校の先生でもそうです。私がある教育委員会主催の記念講演で行ったとき、教育長が最初に約20分ほどお話されました。横で見てたら、3分の1が目をつぶってうつむいているのです。人の話

を聞くのに、うつむいて目をつぶって聞けと教えますか。言っていることとやっていることが違うのです。子供たちは知らないからと言っても、先生は知っています。自分のことは自分でいちばんよく分かっているのです。自分にうそをついたらいけません。先生も生身の人間だというのは分かりますが、先生はやはり子供たちに大きな影響を与えるのです。ですから、「『私も生身の人間だ』などと言う人は、こんな仕事をしたらあかん、先生、辞めなはれ」と思いっきり言いました。子供たちの人生を左右する、それぐらい大事な仕事をやっているということを自覚しなさいということです。終わってから教育長が「いい話をしてくれました」と言ってくれましたが、教育長がそれを言わないといけないのです。でも、これが実態なのです。

余談ですが、この間、岐阜県の梶原知事に会いに行きました。知事室に入ると、県民に信頼される仕事を進めるために、いわゆる「お役所仕事七つの罪」というのが掛かっていました。「遅い」「冷たい」「堅い」「威張る」「逃げる」「隠す」「無駄遣い」の七つです。この七つを言って「だれのこと？」と聞いたら、10人いたら10人ともが「お役所仕事」と言います。それぐらいイメージが定着しているのです。

でも、今、威張るといっているのはもうなくなってきました。あるいは、行政の方々が団体とかでご挨拶されます。「日頃は大変お世話になりました、誠にありがとうございます」とおっしゃいますが、間違っているのです。我々市民、府民が行政の人たちに「日頃はお世話になりました、誠にありがとうございます」と言うならよく分かります。反対なのです。挨拶自体もどこか間違っているのです。

・奉公後の転職

話を戻したいと思いますが、気がつけばその乾物屋さんで5年間お世話になりました。市場を全面改装するというのでひまが出るのですが、この5年間でなかったら今の私はありません。何を学んだかという、ただ一つ「耐える」ということだけでした。

貧乏人の子には教育は要りません。おかげさまで私は貧乏人の子供に生まれましたので、辛抱することを知っています。ものを大切にすることを知っています。もののありがたさ、人のありがたさ、感謝する心を体で知っています。人間というのは、金や物を与えたら与えた分だけ教育が要るのです。教育できないなら、金や物を与えなければいいのです。与えなかったら子供はグレルじゃないか、あるいは従業員は辞めていくじゃないか、だから「心で待て」ということを言わないといけないのですが、難儀な時代です。

私の子供が大学に行ったとき、「お父さん、車買って欲しい」と平気で言うのです。私は言いました。「大阪に帰ってこい。だれのおかげで大学に行ってるのか。夜中店に行って皿洗いしている従業員は中卒や中退や。そういう従業員が頑張ってくれているおかげで、おまえは大学に行ける。おまえを大学に行かせているだけでも親として気が引けるのに、なんてことを言うのか。夜中、皿洗いをしてる従業員に、『車買ってもいいですか』と聞いてこい。『買ってええ』と言ったら、いつでも買ってやる」。

親が釣った魚を子供に与えるのはたやすいです。でも、魚の釣り方を教えてあげるのが親の愛だと思っています。PTAなどでもよく言うのですが、子供をグレさせようと思ったら、一

発です。思いっきり与えて言うとおりにしてやれば間違いなくグレてくれます。でも、それを平気でやっているのです。若いときに貧しげに育ったから、せめて子供だけにはふびんな思いをさせたくないと思ってやっていること、それは親のエゴであって、子供には何のプラスにもならないのです。

日本がこんなに経済大国になった大きな要因は四つあります。「勤勉、努力、誠実、始末」です。これはどこに行ったのですか。確かに物質的には豊かになりました。けれども、心が大変貧しくなっています。今日はわざわざ、講師のために水を用意してくださいました。この水は350mlで110円です。ガソリンは1リットルで110円です。この水はガソリンの3倍しているのです。これを平気で飲んでいるのです。水道の水でいいのです。

とにかく、市場を全面改装するというのでひまが出ました。実家のほうで私の姉婿が小さなレストランを開業していましたので、そこを手伝うということで話がついていました。タマネギの皮むき、ジャガイモの皮むきを手伝っているうちに、この仕事が合っていると思いました。転職です。本来なら中学を卒業してすぐこの道に来ればよかったのですが、人よりも5年遅れています。3年かかるところを1年で教えてやるからついてくるかと言ってくれました。もちろんやる気がありますから「ついていく」と言った途端に、「では、同時に三つの仕事を進行させる」と言われました。

そんな器用なことができるのかというと、実はできるのです。冷凍のエビを水道の蛇口の下で溶かしながら、コンロでだしをとる湯を沸かし、キャベツを刻むというのは、同時に三つの

仕事を進行しているのです。これを絶えず頭で考えながら、体で学べということなのです。そんな器用なことができるのかと思いましたが、仕事に対する計画性ができてきます。一つできた、二つできた、三つできた、四つもできるやろかとやっていくうちに、だんだんと心も繊細に養われ続けていきます。そこで2年間、しかも始発から最終電車まで年中無休で技術を学びました。

でも、やはり身内ですから、他人のところで修行しようと思って、入り口に「見習い募集」と張り紙がしてあった梅田の大きなレストランに転職しました。そして半年ほど経ったころ、義兄から、独立しないかという電話がかかってきました。ところが、残念ながらそれを言われたときにはお金が一銭もありませんでした。

お金が欲しいときにお金を追っていたらあかんです。お金は使わなかったら貯まると思って、使わないで思いっきり貯めていたのですが、お店を借りる保証・敷金の相場を聞いていたら、幾ら貯めても追いつきません。保証・敷金のほうが先に上がっていくのです。こんなことをしていたらだめだと思って、17歳で株式に手を出し、それだけでは物足らず、小豆の相場に手を出したのです。これならすぐに独立できるお金が貯まるなと思って、株式から預金から全部つぎ込んでいくうちに、北海道小豆の大豊作、そして大暴落になって、血のにじむような約50万のお金を全部、その商品相場でゼロにしまいました。でも、その体験、経験があればこそ、あのバブルまっただ中のときでも、一切財テクには手をつけませんでした。

義兄に「金一銭もあらへんねん」と言うと、「金は一銭も要らない。保証・敷金なしだ」と

言います。それだったらいいなと思ったのですが、おじいちゃんとおばあちゃんできているお好み焼き屋さんだということです。義兄は大阪は住吉の長居というところに住んでいまして、電信柱に張ってあった「お好み焼き屋、経営してみませんか。保証敷金なし」というビラを見て、私に独立しないかと言ってくれたのです。そのとき私は22歳、コック帽をかぶって、白衣を着て、スカーフを巻いてというカッコよさにも憧れています。そんなときに「お好み焼き」です。お好み焼きを食べるのは好きですが、あんなものは一人前の人間が携わる職業ではないと思っていました。この「お好み焼きは嫌だ、携わるのは嫌だ」という思いが今の「千房」を作ったのです。

私は社長ですが、お好み焼きに携わることは恥ずかしいし、カッコ悪いと思っていました。そこに働く従業員はもっと恥ずかしいし、もっとカッコ悪い。幾ら募集しても、従業員が来てくれないのは当たり前だ。お好み焼きが企業にならないのは当たり前だ。そうであれば、従業員が胸を張って、自信を持って働いてくれるようなお店を作ろう、そんな会社にしようと思った、これが今の「千房」だったのです。

・お好み焼き「千房」誕生

無理やり勧められて、おじいさんとおばあさんがやっていたお店に採用されて、6年間お世話になりました。そして、ちょうど6年目、家主さんから出て行ってほしいと言われました。保証・敷金を取られませんでした。家主が必要なときはいつでもお店を出て行ってくださいという条件があったのです。最初の1年、2年は、いつ言われてもいいようにそれなりに頑張

ってました。ところが、子供が一人でき、二人でき、家主さんからお祝いまでいただいでいて、まさか出て行けなんて薄情なことは言われないうだろうと、それなりの生活をしていました。ところが、「出て行ってください」と言われてしまったのです。忘れもしません。昭和48年10月10日、まさに父の命日でした。

預金を調べたら80万しかないのです。あと2か月ちょっとです。3歳と5歳の息子、女房と、どこにも相談しにいくところがありません。小さな小さな取引があった信用組合に行きましたら、「6年間もいたら、営業権も居住権もある。訴訟しないか、勝てる」と言われましたが、「22歳の私みたいな者が、経営者の仲間入りをさせてもらった人に砂をかけて出て行くわけにはいきません」「では、店を探しなさい」ということで店探しが始まりました。

我々飲食店を営む者にとっては、大阪でしたら大阪の梅田キタ、あるいはミナミ、道頓堀、千日前、そんなところに店を持てるのが最大の夢であり、大きな目標です。その千日前の四つ角を曲がったところに5階建てのビルがあって、1階にあったオーナーが経営されている不動産屋さんに入って物件を紹介していただいていると、その社長さんは何を私に興味を持ったのか、「あなた若いのに偉いね、どこの出身？」と聞いてこられたのです。聞かれるままに今までのことを答えていました。紹介していただいた物件があったので、「では見せていただきます。ありがとうございました」と出ようかなと思ったところ、その社長さんとの話を一部始終障子の陰で聞いておられた社長さんの奥さんが、突然障子を開けて、「父ちゃん、この人にうちの2階を貸してあげたらどう？」と言ってくださっ

たのです。この2階こそが、現在の「千房」千日前本店です。この奥さんとの出会いが、私の人生、運命を変えた大きな出会いとなりました。

細い階段をどんどん上がると、約35坪のフロアがありました。内装・設備、保証・敷金、総投下資本は3500万円です。80万円しか預金がない私は、信用組合に飛んでいきました。「中井くん、2階というハンデもあるし、よく考えなさい」と言われながらも、実家へ飛んで帰って、このときとばかり、「千日前に物件が見つかった。田んぼを担保に入れて、3500万借りる」と言うとおふくろがぼろぼろ涙を流しながら、「千日前ってどんどこか知ってるのか。あそこは昔からむちゃくちゃ怖いところや。生き馬の目を抜くようなところで、おまえみたいな田舎者が何ができる。頼むからやめなさい」「いや、おれは自信持ってる」「違う。おまえは小さい時分からうぬぼれがきつかった」(笑)。自信とうぬぼれは紙一重だということがよく分かったのですが、最終的に家主さんが500万まけてくださって、80万しか預金のない私に、信用組合が3000万円全額担保なしで融資をしてくれました。これが「千房」の誕生です。

2年ほど経って、その信用組合の理事長から食事に誘われまして、その席で、「中井くん、創業当時のことを覚えているか」「はい、忘れもいたしません。担保もなしで」「いや、実は大きな担保があったんだ」とおっしゃるのです。「多分知らないと思うけれども、奥さんと二人でやっているときに君の店を訪ねて、そのときに奥さんから丁稚奉公の話詳しく聞いた。そして、金銭出納帳を見せてもらったことを思い出した。道で5円拾った、10円拾った、そんなものまで克明に記帳されていた金銭出納帳のこ

とを思い出しながら、すごい担保の裏付けがあると思った。よく頑張ったね」と言われたとき、飛んで帰って、今まで無造作に入れてあった引き出しから金銭出納帳を取り出して、思わず両手を合わせました。「おまえがおれを助けてくれたのか」。

・継続は力なり

継続は力なりです。私は17年と9か月、786名全従業員の給料袋の中にメッセージを入れ続けています。「千房」を創業して今年丸31年になりますが、17年前までは全従業員に給料を現金で手渡していました。潮出版社から今年の春に出版された私の本、『できるやんか』にも詳しく書いていますが、非行少年、非行少女といわれる子供を採用してきました。全国からレベルの高い非行少年、非行少女が集まって来て、給料日には全国的に現金盗難事件が相次ぎました。でも、罪を憎み人を憎まず、疑わしきは罰せず、人を見て法を説けです。取ったやつが悪いというのはだれが何と言っても悪いのですが、そんな環境を作っていることがもっと悪い、現金で手渡ししているからだ、銀行振り込みにしたらいいのだと思いました。

でも、月に1回ぐらい従業員の顔を見たい、そしてねぎらってあげたい、励ましてあげたい。それは給料日でなくてもいいけれども、やはり給料日というのはそれなりの意義のある日です。そのときに、私の友人が従業員に社長自らメッセージを出しているということを知って、「では私もやろう」ということでやり続けて、17年と9か月経ちました。

ちなみにこれは今年の11月のメッセージです。「暦の上では立冬、風邪引いていませんか。あす

は仙台へ、そして北海道と、店舗視察で全国に飛び回っています。朝、目が覚めたら、ここはどこ？ 自分の所在が分からなくなるときがあります。今ここで大きな地震が起きたら何が心残りになるだろう、ふと考える。現代社会では、ライフラインが止まれば全く機能も止まります。便利な携帯電話ですら役立たずです。人間の誕生は予知してくれますが、死は予測できません。若くて健康、だから長生きできるとは限りません。やり残していることよりも、毎日毎日を悔いのない生き方が大事です。先日、静岡に伺いました。新任の斉藤店長の誠実な人柄は、部下たちから大きな信頼を得ていました。また、のれん分けの両替町店、気仙オーナーとも久しぶりに再会しました。いつも自信に満ちあふれた変わらぬ姿、夫婦が力を合わせ、支え合う姿に安心しました。さあ、間もなく賞与の支給です。以前のような、一日も早く、準社員にも賞与支給ができるようにしたいものです。郡山店の青井様、高槻富田の西山夫婦、ともにのれんを守ってくださいありがとうございます。今のところ、視察店舗は及第点、必ず全店伺いますからご安心ください。全店に告ぐ、賞与資金頼むよ。平成16年11月7日 中井政嗣」。

これは毛筆です。最初書き始めたころは、みみずに覚醒剤を打ったような字を書いてました。毎月毎月大変ですねと言われますが、朝、顔を洗って歯を磨くのは大変ですか。幼稚園のときは大変だったのです。でも、何ともないわけです。継続は力なりです。続けると、そこには実績ができます。そのことが自分の大きな自信につながり、それが信用になって、それが力になっていきます。よいことは続けなさいと思うのです。

・言葉と心

そんなことで「千房」が誕生しました。営業時間は昼の12時～深夜3時まで、年中無休です。私は3時間半から4時間の睡眠時間で、青白い顔をしてやせこけてました。飲食業で青白い顔でやせこけていたら、ここのは栄養がないのではないかと思われそうですから、その当時一滴も飲めなかったお酒をおちょこに引っかけて、顔をほんのりさせながらお店をしていました。

1日が終わって5人の従業員が帰っていきませんが、帰るのが怖いのです。皆さんの職員は間違いなく明るく日出勤してこられるでしょうが、店長が半年以上寮まで行って起こさなかったら出勤してくれない従業員もいるのです。優秀な従業員はたくさんおりますが、そんな中での、「お疲れさまでした」は単なる「お疲れさまでした」ではありません。「今日一日ご苦労さん、明日も出勤してね」という願いをこめながらの「お疲れさまでした」なのです。

浮かぬ顔をして帰るような人がいたら、引き留めました。言葉にして、「明日、大丈夫か」と確認しながら「頼むで」「お疲れさまでした」。明るく日、だれよりも早く出勤して待ちこがれているのです。「おはようございます」と1人来て、やがて5人来たときには、「ああ、無事営業ができる、ありがたいな」と思います。挨拶は心のしぐさです。言葉は魂、言霊ともいわれますが、「おはようございます」というのは単なる9文字ではありません。その9文字の中にどんな心がこもっているか。たった一言二言言葉を交わしただけで、何を考えているかという瞬時の心が店長に分かるのです。これを教えてくれたのが非行少年、非行少女でした。

彼らは担任の先生と保護者と来ました。1時

間ぐらい無表情で態度が硬直しています。言葉をしゃべりません。先生にも保護者にも出て行ってもらって、一対一で2時間、3時間、4時間、5時間、終わったあとはぐったりします。でも、何か言った拍子に顔の表情がぱっと変わります。これは何を意味するのか。手を動かして足を組み換えた。首を動かした。これは何を意味するのだと悟らされたのです。「おまえ、理解できるか。分かるか」と聞いたら「はい」と言った、その「はい」は活字に書いたらただの「はい」ですが、いろいろな「はい」があります。心なのです。心が瞬時に表情となって表われます。心が瞬時に言葉になって出てくる。心が瞬時に態度になって、所作になって出てくる。この三つをしっかりと見ていたら、聞いていたら、瞬時の心が手に取るようにして分かります。そう思ったときに、自分だって分かれるのだな、表情豊かにしよう、態度は控え目にしよう、言葉を慎もう、いろいろなことを思います。

今日、もちろん朝、顔を洗いました、ひげも念入りに剃ってきました。ここに上がってくる前にもう一回お手洗いにいって、鏡に映っている自分を指さして「行け!」と言ってここに来たのです。こんなものですが、私の顔です。髪が乱れていようが、服が破れていようが、ひげをはやしていようが、おれの勝手だと言いそうなのですが、違うのです。この私のすべてというのは、皆さん方一人一人に何らかの影響を与えるのです。同時に、皆さんの態度が、その姿勢が、そのすべてが私に影響を与えるのです。

大阪のある出版社の社長が飲みに行かれたとき、バーカウンターの隅っこで、チビチビ暗い感じで飲んでいるお客さんがいました。「あなた、どこか体の具合が悪いのですか」「悪くあ

りません」と言われた途端に、「だったら、目障りだ」とおっしゃったのです。このかたは自分でお金を払っているのです。これはこのお店の責任なのでしょうが、でも、あなたのその姿が周りにどんな影響を与えているのか、あなたはお存じですか。

今日お集まりいただいている皆さん方は、間違いなく周りに大きな影響を与えられるかたばかりです。どんな影響を与えているのか、胸に手を当てたらよく分かります。皆さんのたった一言がどれほど影響を与えるのか、これは立教大学の実験で立証されています。山の頂上からとふもとから、2班に分かれて出発します。出会ったときに、登ろうとする人に「元気ないですね」「顔色悪いですね」「休まれたらいかがですか」と声をかけてくと、ふもとから頂上までただの一人も登れなかったのです。人は人の言葉に惑わされるのです。

・夢と希望を与える言葉

私どもでは深夜までやっている店があります。根っから青白い体質の従業員もいるのですが、従業員を呼んで、「顔色悪いな」と本音で心配して聞いたのです。でも、この話を聞いてから、そんなことを絶対に言うてはいけないと思いました。前と同じように青白い顔をして来ますが、「お、元気そうね」と言っていると、「はい、元気なんです」と顔に赤みがさしてきます。身内だから本音でと言いますが、相手の心が傷つくようなことを平気でいうのは身内ですか。身内であれば、夢と希望を与えてあげるのが身内ではないのですか。褒めすぎてグレていった子供は一人もいません。褒めすぎて辞めていった従業員は一人もいません。そう思ったとき、

言葉遣い一つにしても、どれほど影響があるかということです。

行政の人たちと市民は身内です。行政の方々には市民、府民にサポートすることが何よりの使命です。そう思ったときに、夢と希望を与えるという役割をされることによって、行政は間違いなくよくなります。これは振り返ってみたら分かりますが、皆さん方が仮に経営者だったら、とっくにつぶれています。

平成2年、道頓堀に「千房」のビルを建てました。一坪が1億269万6000円、地下1階、地上7階建て、49億円かかりました。いちばん高いビルです。今、その不動産が幾らかというと3億です。間違いなく債務超過です。銀行から経営破綻先と見られ、融資が止まりました。変な話ですが、それで救われたのです。要するに、業績は上がっているのです。でも、利益は全部返済に回っていました。返済を大幅に縮小していただきましたが、融資が止まりました。それでも、業績はいいので、ボーナスは出してあげたい。利益はないのだけれども、銀行からボーナス資金として融資してもらったのです。これは返さないといけない、利息も払わないといけない、だから今まで以上に頑張らないといけないのですよと思いきり言っても、だめなのです。私は土下座する思いでメッセージに書きました。「申し訳ありません。融資が止まりました。出したいと思う気持ちはやまやまだけど、出せないのです。自力で頑張る以外にないのです。ご協力よろしく申し上げます」。

ただの一人も退職者はありませんでした。2年間止まりました。そして今、おかげさまで、自力でしっかりとボーナスが出せるようになりました。銀行には「よう、止めてくれた」と思

っています。私の性格から言えば、銀行から金を借りてでもボーナスを出そうという思いでしたが、現在の世の中、急によくなると思いません。

創業したのが昭和48年、第一次オイルショックのまっただ中です。でも、そのときには、新聞なんて、ラジオなんて、テレビなんて、聞いたことも見たこともありません。第一次オイルショックなど全く私は知りませんでした。なんで暇なんやろ、どうしたらお客さんに来てもらえるのだろう。そんなことばかり考えていました。つまり、これは全部内部要因だったのです。

今、おかげさまで、周りの経済の状況はよく分かっています。不況が身にしみついて分かっています。全部が外部要因としか受け止められませんでした。去年の5月でした。はっとして、創業当時は全く世の中のことが関係なかったと思ったときに、従業員に徹底的に、「すべては内部要因です。外部要因は関係ありません。売り上げが上がっているところ、利益が上がっているところ、それは店長の能力です」ということをはっきり言いました。不況といいながらも、ガンガン伸びている「千房」の支店もあれば、ガンガン落ちていった「千房」の支店もありました。社長は同じ私です。同じ味、よく似た場所、よく似た値段です。何が違うのか。現場に行ってみて分かりました。

ガンガン伸びている「千房」の支店は、支店長がえらい元気なのです。従業員も生き生きしています。お客さんがニコニコして召し上がられます。落ちている店は店長が元気がないのです。私が心配して「休みを取っているか」と聞いたら、「週に2日休ませてもらっています」。でも、元気のいい店長は月に3回しか休

んでいないのです。私は思わず「おまえ休みすぎじゃないか」。言ってしまいました。店長が元気がないものですから、従業員にも活気がありません。お客さんまでもがうつむいて食べています（笑）。不況なんて関係ないのです。店長が不況なのです。

人間には元気のメカニズムというのがあります。明るい返事に暗い話は似合いません。暗い返事に暗い話はよく似合います。要するに、暗い返事をする店長と明るい返事をする店長では離職率が違うのです。まさか辞めていく社員が店長に向かって、「店長、今月いっぱい辞めさせていただきます」とはつらつとして言うことは絶対しないのです。ほそほそと言います。「店長、ちょっと話があるのですが」と言ったときに、暗い返事をする店長は察しますから、「今月いっぱい・・・」と言いやすいなのです。でも、明るい返事をする店長は違います。「店長、ちょっと話があるのですが」と言った途端に「はい！何ですか」と言われたら、「また改めて」となるのです。

花にはチョウチョがひらひら飛んできます。うんこに飛んでくるのはハエぐらいです。つまり、うちの従業員はなぜ社長の言うことを聞かないのかとぼやかれる経営者もいらっしゃいますが、答えは簡単です。トップがうんこだからです（笑）。あなたにはあなたに似合いのものがちゃんと備わっている、すべて自分だということを行っているのですが、とにかく人間には元気のメカニズムがあります。時計の振り子を見てください。チクタク、チクタクと動いています。真ん中はどうなっていますか。つまり、心の区切り、切り替えができる人が元気なのです。

人間生きていれば、仕事してれば、どうしようもないこともあります。でも、責任が重いのと心が重いとは別なのです。やっかいなのは、責任が軽くせに心が重たい人です。これはどうしようもないです。責任が重いのと心が重いのは別です。責任が重くても心は軽くなければいけません。そのためには心に区切りをつけることが何よりも大事です。まして、行政の方々は、市民、府民に対して正論でバンバン来られます。我々もそうです。部下に対して正論でバンバンいきます。正論で相手をやっつけることはたやすいのです。しかし、正論でやっつけても相手には感情が残ります。リーダーたるもの、感情の管理をすることが何よりも大事です。

頑張れ頑張れと言ってしまうのですが、頑張っている人に頑張れというのは酷です。それよりも「よく頑張ったな、偉かったな」と言うことのほうがよほどためになると思うのです。うまくいくのも、うまくいかないのも、たまたまそうなるということは絶対にありません。全部なるべくしてなっている、そのもとは自分自身です。でも、生まれてから今日までのことは変えることができません。今こうやって話をしていてることもそうです。皆さんに変えてもらおうなどと思ったところで、実現できるわけがないのです。つまり、過去と他人を変えることはできません。けれども、自分と未来は変えられます。

専門知識とか人を育てるノウハウというのは、本にでも書いてます。でも、今日はこれはライブです。生です。金もなかった、やる気もなかった、学歴も能力も才能もない、そんな人間がこうなっている事実があります。その中で体験

を正直にお話ししました。何かを感じ取っていただけたらと思います。自分と未来は変えられるのです。大きく変われというのは改革とありますが、大きく変わらないなら、ちょっとでも変えたら、これを改善というのです。

きれいな花を飾っていただきましたが、「この花は何のために咲いているの」と若い人に聞いたら、10人のうち2人は「勝手に咲いている」と答えるでしょう。でも、そんな言い方はないだろうと思うのです。相田みつをさんは、「美しいものを美しいと思える、あなたの心が美しい」とうたわれています。結論から言って、花はただ咲いているだけ、花を介して自分の感性を述べたのです。「あの人、いい人やな」というのは、あなたがいい人なのです。逆に、「あいつ、あんなやつやねん」と人の悪口をどつと言われるかたがいらっしゃいますが、それは「あなたが」なのです。これは間違いありません。

なぜこの美しい花を見て感動するのか。山のてっぺんの岩肌に隠れて咲いている一輪の草花を見つけたとき、人間は感動、感激します。それは、命一生懸命生きているからです。人間もそうです。だらだら生きているやつにだれが応援するのですか。そう思ったときに、能力があるとかないとかは関係なく、やはり一生懸命生きている人を、人は応援するのだなと思いました。

今、子供たちは大変愛に飢えています。大人も大変愛に飢えています。マザー・テレサさんは、愛の反対は無関心だとおっしゃっています。関心を持つというのが愛です。今、関心が大変薄くなっている。ですから、愛が欠けているということにつながっているのです。私の友人が

素晴らしい詩を作っているの、これを朗読して終わりたいと思います。

「胸の泉に」 塔 和子

かかわらなければ

この愛しさを知るすべはなかった

この親しさは湧かなかった

この大らかな依存の安らいは得られなかった

この甘い思いや

さびしい思いも知らなかった

人はかかわることからさまざまな思いを知る

子は親とかかわり

親は子とかかわることによって

恋も友情も

かかわることから始まって

かかわったが故に起こる

幸や不幸を

積み重ねて大きくなり

くり返すことで磨かれ

そして人は

人の間で思いを削り思いをふくらませ

生を綴る

ああ

何億の人がいようとも

かかわらなければ路傍の人

私の胸の泉に

枯れ葉いちまいも

落としてはくれない

皆さんと共に、これからもしっかりと、府民、市民とかかわってまいりたいと思います。長時間どうもご清聴ありがとうございました（拍手）。